

二次元ドリームノベルズ

18
未 満



サンダークラップス!

リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

テストメント

羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章
テストメント
を認めない 004

第二章
手作り
巨大ロボット
の挑戦 021

第三章
スーパーヒーロー
世界公開陵辱 034

第四章
新宿公園の
淫らな惨劇 080

エピローグ
三日の夜 136

ローズデバイス

Rose device

「サンダークラップス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼い
ころに重傷を負い、体内にナノマ
シンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着
して闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラップス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美女。
南米の自然の精霊たちに認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿し
てジャガーの獣人に変身して魔法
を使う。

フレア

Flare

スーパーヒーローチーム
「サンダークラップス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ダーに創られた人工人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。



スターサンダー Star thunder

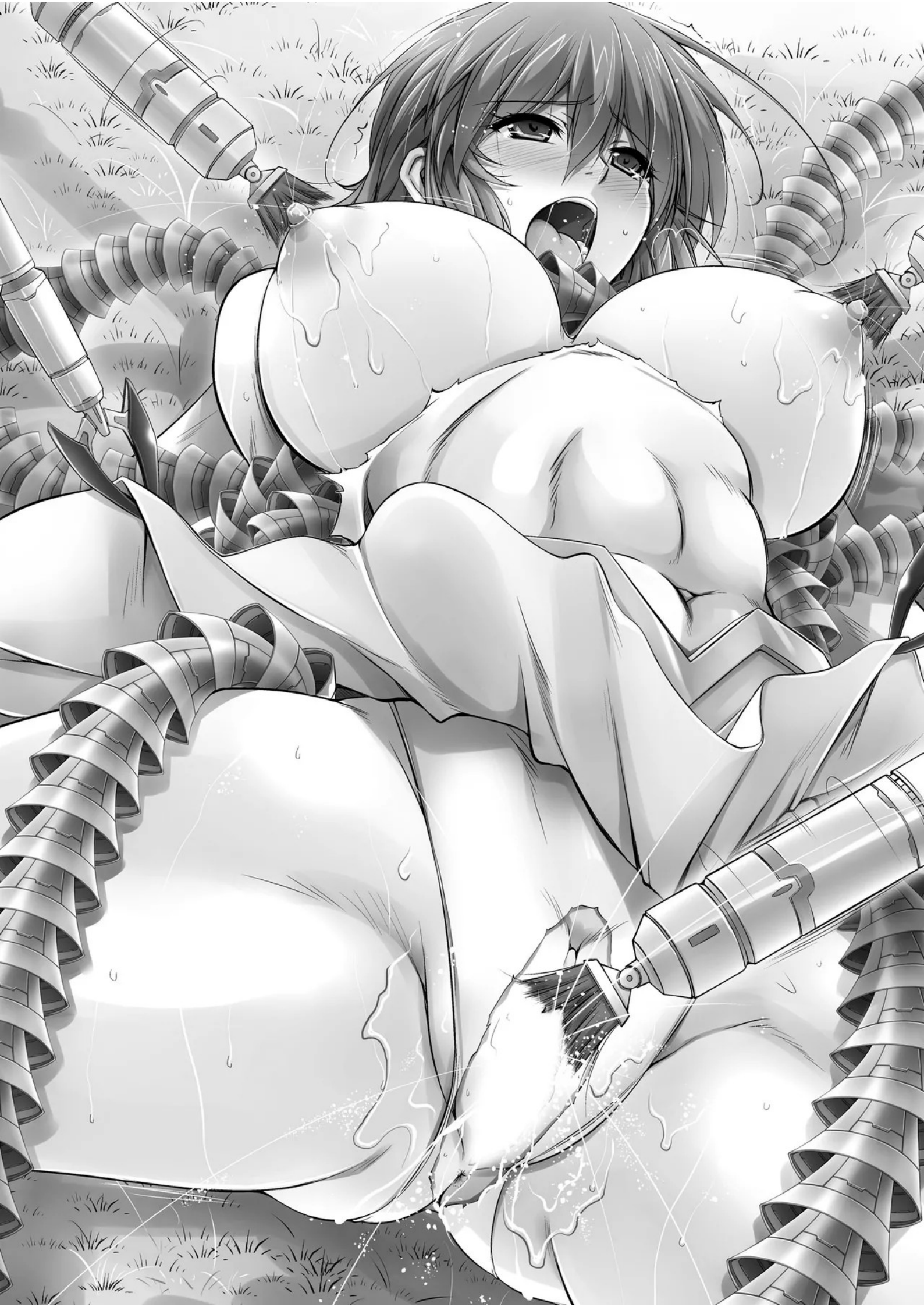
「サンダークラップス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

テストメント Testament

多発しているオフビート殺人事件
に関係するとされる、謎のキー
ワード。

サンダークラップス! リターン CHARACTERS テストメント













目次

- 第一章 テスタメントを認めない
- 第二章 巨大ロボットの挑戦
- 第三章 スーパーヒーロー世界公開競争
- 第四章 新宿公園の凄惨な惨劇
- 第五章 三日月の夜

サンダークラブス！リボーンテストメント

第一章 テスタメントを認めない

鈴堂麗はダイニングキッチンで夕食の天ぷらを揚げていた。二十代なかばの豊満な美しい肉体をつつと純白の厨着を着、手にした箸も、髪は合羽橋通員街で買ったプロ仕様。衣裳と髪にふさわしく、天ぷらを揚げる手つきは軽やかに美しい。その手がふいに止まった。

美味しそうに音を奏でる鍋の上に、いきなり小さな、身長十センチの美少女が出現して、油の蒸気に立っている。ちろん立体映像。スーパーヒーローチームのサンダークラッシュの自宇審基地である大きな日本館屋を管理する人工知能のアドバイザー小霧光だ。キラキラとキラキラは何層もモテルオンシをして、今は黒髪を大きなツイーデルに結んで、人型アイドルグループ『みらくるワッフル』のピンクのステージ衣装を着ていた。

立体映像の少女は、自分をデザインした主人を見上げる。麗は「テストメントの新たなテレビニュースが入りました。御指示の通り録画をしています」

「ありがと。今すぐ、みんなを居間に呼んで」

麗の中から急いで天ぷらを出して、大皿の紙に並べると、リビングを切った。麗が居間のまま居間に入ると、麗に敷いた座布団にも二人が座っていた。

北原 静子は自分用の研究室でのプロダクシングを中断して来た。十代後半の華奢な身体に、地味な白いワンピースを着ている。柳イサハラと日向 燐はおそろいのランニングシャツとトランクス、リトルボルトに呼ばれるまで、二人で軽いスパーリングをしていた。二十代はじめのしなやかなで力強い肉体を上装させて、浮かんだ汗をタオルでふいている。麗は空いた座布団に正座すると、リモコンでテレビをつけた。

画面に人型の女子アナが映り、事件用のまじい顔つきでニュースを読みはじめる。

「今日、午後二時過ぎに、東京都墨田区のマンションで、住人の田嶋重明さんが射殺死体で見つかりました。現場を捜査した警察によつて、被害者は通称『キツツキ』と呼ばれるオフビートの暗殺者だと判明しました。ウッドベッカーは小さな鳥に似た生物を操り、鋭い嘴で脳や心臓に穴を開けるという方法で、わかっているだけでも八人を殺害しています」

静子が高い声であげて、座布団から身を乗り出した。「ウッドベッカーの正体をつかまうと、警察やヒーローたちの間で競争になって探検していたのに……」

オフビート。それは世界中にいる超人たちの総称。かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンDCへ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身で宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、人間を超える肉体を持ち、自在に空を飛び、鮮やかな赤いコスチュームとケープをまとっていた。

男は集まった記者たちへほがらかに笑って、僕は子供のころから『超獅子』と呼ばれていた、と語った。最初に世に現れた超人スーパーオフビートに刺殺されたのが、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。彼らは生まれつきの超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは悪志を持つロボット、妖怪や魔物。はては賢人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちのある者は平凡に暮らし、ある者は特別な能力を適用した。そして多くのオフビートたちが、始祖スーパーオフビートになつてスーパーヒーローとして活躍している。日向燐、鈴堂麗、柳イサハラ、北原静子。四人も各々異なる理由で、様々な超能力を得たオフビートだ。

燐はフレア。麗はスターサンダー。善原はオセロット。静子はロースデバイス。

と、ヒーローネームを名乗り、四人でサンダークラッシュというヒーローチームを結成している。世にデビューしてから間もないが、人気の高い新進気鋭のチームだ。

四人が予想した言葉を、女子アナが告げた。「田嶋さんの胸には「遺言」に従い、死を送る」と書かれたカードが乗せられていました。同じカードを残す射殺事件は、これで六件目になります。過去五件の被害者も全員がオフビートの被害者でした。画面に六枚の写真が映った。テレビで見つめる四人の顔がとらけくくなる。すでに何人も目にした、これまでの犠牲者たちだ。いずれもサンダークラッシュは相手をしたことがないが、二人は流石なコスチュームを着て大都市で獲れる超能力ヒーローが駆けつける前に射殺された。

もう二人は、表に現れなかった影の超能力ヒーローも警察も把握していなかったカードで撃たれた。さらに二人は、驚くべきことに刑務所の控室の中で銃撃を受けた。

『連続射殺犯の素性は多岐にわたるにわかつていませんが、カードに書かれている言葉から、ネット上では「遺言」と呼ばれていま

す

画面が切り替わり、有名な匿名掲示板のスレッドが映し出された。
『犯罪者を捕まえるだけのスーパーヒーローと違って、完全に退治してくれるんだから、テスタメントこそ本物の正義だ！』
『テスタメントみたいな、悪党を殺すのをなんているんだっけ？』
『白痴だよ』
『本当に必要なのは、ヒーローじゃなくて、ヴァランティーン！』
『それはダメよ！』

轟の音声とともに、身体から青白い電光が伸びて、テレビの映像をグニャリと歪ませた。スターサンダーのヒーローネームを名乗る轟は、身体から電気を発して、操る能力を持つ、ついつい感情が昂って放った電撃を急いで自身の体内へ回収して、轟は柔和な表情でチームメイトを見まわす。
『見ての通りよ。テスタメントが犯罪者を殺すたびに、共感する人々が出てきていくわ』
羊渠が南米育ちらしいオーバーな身振りで、ランニングシャツから露出する胸筋をすくめてみせた。

ポクがちっちゃいころに、ポクが生手れた国にも、『軍隊操縦』と名乗るヴィランテのグループがいたよ。全員がつかった黒いコスチュームで、ギャングを何人も殺して、ちよとだけ人気が出た。でもヒーローの『戦術家』に逮捕されて、結局は消えちゃった。ポクもカラヘラトリナにあこがれて、よくまねしたっけ』
轟は厳しい顔つきで、画面の中で電撃やヒーローの不甲斐なさを語る解説者をにらむ。
『ヴィランテが消えたのも、その時々ヒーローの活躍があったからだ。人々に悪を正義と誤解させる犯罪者は、できるかぎり早く捕まえなくては、あー』

まだ汗に濡れている轟のランニングシャツの上半身に、背後から轟が抱きついた。
『その通りよ！ 偽物の正義に負けないように、サンダークラッシュもがんばらなくてはね。さあ、ご飯にしましょ』
『わー！ 轟ちゃんの天から大好き！』
羊渠が子供のように歓声を放って重い空気を吹き飛ばし、轟と静子の手を握って、猫のように身軽に立ち上がった。

轟がコンニエンスストアの壁の時計を見ると、午前一時七分。
二ユーステスタメントの六人目の犠牲者が出たという一報を見てから、ちょうど六時間たった。
轟はホットキスの針の種だけをレンジ出した。机の引き出しに準備する針がきれていくと気づくと、深夜だというのがまんてきずに買いに来ました。
自宅兼サンダークラッシュ基地から歩いて十五分ほどのよく利用するコンニエンスで、白いシャツとタークルのデニムパンツにサンダルという気楽な格好だ。針のついた箱をパンツのポケットに押しこんで、コンニエンスを出た。

焼たち四人が住んでいるのは、昔からある住宅街。もちろん住民は近所にスーパーヒーローチームの基地があることは知らない。鈴堂麗は金持ちの娘で、古い部屋敷を買って、友人二人と女だけの気楽な共同生活をしている。といつこになつて、住宅街だけあって、この時間に焼以外の出歩く人影もなかった。
いきなりすぐ目の前に男が出現するまでは、明かりが灯っていない家のレンガ壁の表面から、男の身体が突き出た。
二十代なかばのチャラい顔が、街灯に照らされる。壁から現れたタークルグリーンのジャージの右手は、黒いスポーツバッグの持ち手を握っていた。

壁の前に全身を現した男も、轟に気づいて、二人は同時に声を出した。
「えっー」
「あー」
轟のほつが、身体が反応が違った。ほとんど反射的に右手を伸ばし、ジャージジャージの右の首をつかんだ。
「きみは泥棒か？ あれっ！」
指に触れるジャージの布の感触がなくなった。左手の指をすり抜けて、男の右腕が離れる。
「物体をすり抜けるオビートか！」
ジャージ男が顔へ顔を向けて、得意満面にチャラチャラと笑う。

「悪いねー、おねえちゃん。また今度ねー」
「こいつー わたしをたのおせつかいな通行人だん思っているな」
自分がスーパーヒーローのフリアだとはれていないのはいが、轟はわりきれない怒りを覚えて、駆けたジャージ男の背中へへと近づけた。
「心ざけるな！ 待てー ええっ！」
意外にもジャージ男の身体が止まった。それどころか背中から轟へ向かって跳びこんで来た。

「嘘っ！」
轟はとっさにジャージ男を受け止める。緑色の右腕に、ついさきはなかつた赤い色彩が目に入った。間違いない鮮血だ。
真夜中だが街灯の光があれば、轟の人間以上の視覚は昼と変わらずに見える。ジャージ男の顔れ方から、真正面から撃たれているはず。しかしまさかすぐに伸びる道路の先に人影はなかった。

「いったいどこから！」
轟の目がくらえる。二十メートルほど前方で道路と交わる狭い路地から、銃弾が飛び出した。常識通りなら道路を横断して、反対側の家の壁に当たるはずだ。
実際には道路の中央で、銃弾の軌道がほぼ直角に曲がった。明確な衝撃を感じさせる動きで、腕の中へくたたりたジャージ男へ向かって飛んでいく。
轟は考えるよりも早く右手を男の胸の前まわし、手の中を銃弾を受けて、路面へ突き落とした。普通の弾丸が当たったくらいでは、肌には傷もつかない。

煙は変身してハニーを発揮するタイプのオフビートではない。狂想な天才科学者によって兵器として造られた煙の肉体は、常に人間を超えたる強さと身体能力を持つ。

シャーシ男の身体を抱いて、夜の中へ呼ばわった。「何者だ！姿を見せろ！」

返答は新たな射撃だった。消音器をつけているのが、発射音はないが、正面からではなく、背後から、左右から、頭上から、銃弾が曲線を描きながら飛来する。

煙はシャーシ男の身体を自分の胸に押しつけて、両腕を素早く動かし、前と左右から来る銃弾を捕ね飛ばし、たたき落とした。背後から来る弾丸は、自分の頭と背中当たるにまかせた。

「おまえの弾は、わたしには効かない。あきらめろ！」
ふいに射撃が止まった。最初に銃弾が現れた路地から、人影が姿を現した。

ごく普通のタークグレイのスーツとスラックスを着た人物。中には黒いシャツ。そして黒い革靴を履いている。体型から見て、大人の男。中肉中背。オールバックになでつけた短い黒髪。衣服の上からは身体的な特徴は見受けられない。唯一目を引くのは、顔だ。

顔に、くすんだ銀色の金属の仮面をつけている。なめらかな表面には鼻がなく、記号的な二つの目と口だけがあった。両目の穴は黒いミラーシートになっていて、銃撃者の目を覗かせない。

単純な造形だが、目と口の微妙な形状で、悲嘆にくれた泣き顔に見えた。哀しみの仮面から、機械を通して変化させた声がかえった。

「通言に従い、その男に死を送る」

「おまえがテスタメントなのか！」
「だが、ここではテスタメントを執行できそうにないようだクッキー」
スーツの腹に、一瞬で距離をつめた煙の拳がめりこんだ。

「うるさいよ」
一撃で頭蓋を飛ばされて、テスタメントはその場に崩れた。相手が気絶したことを確かめて、煙はスマートフォンで警察とサンダークラップス基地へ連絡した。

警視庁の取調室の壁にあるマジックミラーの窓の前には、フレアと年配のベテラン刑事がなややく並んで、中を覗いた。スーパーローとして名前が売れた特捜は、捜査の捜査にある程度参加できることだ。そのためには捜査との良好関係を築いてお

なくてはならないが、昨夜、煙はテスタメントを気絶させてから、警察が来るまでの間にチームメイトが持ってきたフレアのコスチュームに着替えて、警察に経緯を話した。

今朝にはテスタメントの取り調べをするという連絡があり、見学を申し出たのだ。今日もフレアとして捜査に来たので、コスチュームを着ている。

フレアのコスチュームは、よく白いアクリルと書かれる。外から見るとノースリーブにミニスカートのワンピース。じつはレオタード型のボディスーツのウエストに、スカートに見える布が

ついた作りだ。しなやかな質感には白いロングブーツ。高く隆起した胸では黄色い炎の様子が踊り、背中では腰までの長さの白いケープが下がっている。フレアが見つめるマジックミラーの向こう側の殺風景な室内では、机を挟んで刑事と被疑者が向かい合っている。ドラマでもよくある被疑者が展開していた。

被疑者は、煙が捕まえたときと同じタークグレイのスーツだが、銀色の仮面は机の上に置かれていた。あらわになつた裏顔は、四十代くらいの男。これといって特徴のない平凡な容貌だが、薄い唇を強く閉じて、全身から完全な秘密を賣く堅固な決意がみなぎっていた。

事実、フレアといっしょに取調室をつかっている山田刑事が、髪を薄い頭を振ってなややいた。

「あの調子だよ、フレアちゃん」
捜査一課の山田刑事は、サンダークラップスが活動を始めてからのまあいり、何度も協力している。

「やつは息を吹き返してから、ずっとたんまりだね」
山田さん、あいつの素性はわかっていますか？」

フレアの問いに、山田刑事はメモ帳を出して開いた。

「指紋をインターポールに照会して判明したよ。東南アジア各国で暗躍するプロの殺し屋だ。わかつているかぎりでは、日本に入国したのは今回が初めてだね」

「本名は不明だが『バナナショット』と呼ばれている。ふざけた名だが、自分が撃った弾の軌道を自由に曲げられるオフビートだ。くわしい資料はメールでドーヌちゃんに送るよ」

「おかしですね。その能力の暗殺のプロなら、構造的に姿を見せるのは避けるはずですよ」
「むしろそれがひかかっているんだ。フレアちゃんの身体は防弾だ。はっさつはを巻いて逃げたりやあいいい」

そもそもバナナショットは金のために動かない生粋の殺し屋だ。悪党を殺してまわる無罪な責任をやらせやしない。しかし銃撃の経験者は、六件のテスタメントの殺害のものに一致している。昨夜の無空のコンパに至っては、たまたま目についたから殺そうとしたとしか思えない。

あいかわらず沈黙するバナナショットを、フレアはじつと見詰めた。視線がひとりだけで、机の上に置かれた銀の仮面の泣き顔に誘導される。金属製のシンフルな表情が歪むわけでもなく、今やただの遺物でしかないのだ。

ステーションに大きな影が落ちる。理事長はラッキリクとフレアが顔をくると、巨大なハリコクターが一機、降下してくる。よく見ると、長い機体の前後に二基のローターを持つ、タンDEMローター方式の専用輸送ハリコクターだ。専用でありながら、無骨な機体は軍隊ではありえない鮮やかな赤と白に塗り分けられている。まるで小さい子供のおもちゃのようだ。

「あの色は！ あいつか！」
フレアはステーキを踏んで飛行し、対空ロケットのごとく空宙のハリコクターの側面にぶつかった。グラリと大きく傾いた機体を、そのまま全身を使って押す。回転する二基のローターが生み出す力に抵抗して、公園の人がいない場所に着いた。
フレアは身体をねじり、背後の人々に大声を放った。
「逃げろ！ これはショーじゃない！ こいつは機械、機械、狂った、狂った！」

地面に墜落したカラフルな専用ハリコクター、太い機体が飛び出して、鉄の棒でフレアの胴体を殴った。いたたフレアの身体が磚文で、剛力でも、突然加えられた力のベクトルを察知しはしない。即ち飛ばされ、ボールのように地面をバウンドさせられる。
フレアが全身で地面をえぐるている間、ハリコクターが機体の構造を無視して、千キリ千キリと耳障りなノイズを大音量で奏でながら形をほじめた。
ハリコクターからもつ、一本の金属の腕が生え、二本の脚が伸びて、赤と白の派手な機体が直立した。

機首が三つに割れて、中からロボットの白い顔面が出現した。顔面の組み合わせで目と鼻と口をくくくりと造形した、子供向けアニメの主人公ロボットらしい鉄の顔がフレアを見下す。
ロボットの顔の上部から、さらに意外なものがニョッと生えた。
人間の上半身だ。

ロボットの同じ配色のバイロッドスーツを着たマツチオが男の腰から上が、鉄の顔から突き出している。肉体にひたりとフィットしたスーツとロボットの白い金属は、溶け合うように融合して、境界線が存在しない。
鋭角的なヘルメットをかぶった顔は、過剰に自信に満ちた笑みを浮かべて、見る人を見ない不安にさせる。さらに大きく開いた口から、熱血が溢る大声がドックとあふれた。
「やあ！ はじめてお目にかかるな、サンダークラップスのフレア君！ わが名はフレイトスライキング！」

立ち上がったフレアが憤怒の大声、声でさえもした。
「おまえのことはニュースでよく知っているぞ、マシマニアック！」
男は自分自身の身体を機械と融合させた、思うがままに変形させて操るオペレーター。その能力はインフラを操り、大都市を支配することも可能だといわれている。
しかしマシマニアックは乗り物と融合して、パニメに出てくるような巨大ロボットを造って戦うだけに能力を使った。本人は警察スパーヒーローと稱うことを純粋に楽しみ、社会に与える被害はまったく考えていない迷惑すぎる愉快犯だ。

出現するたびに異なるスーパーロボットの名前を自稱するが、世間からは誰かが多岐なマシマニアックと呼ばれていた。
「たいせつなチャリテを妨害したことは許さない！」
いとも、人気が上昇したフレア君と懇話たくて参上したのだ！ ほくほくと鉄拳をもちと鳴らえ！
鉄の足で地面を掘り返して、ロボットが走る。頭上のマシマニアックが右手の拳を握り、前へ突き出した。
今度はフレアも前へ走り、左のパンチを繰り出す。

フレアの拳と、人間の土体と同じサイズの鉄の拳が、真正面から激突した。サイスだけならロボットが圧倒的だ。
だがぶつかった瞬間に、ロボットの拳がグシャリと内割に付かれる。フレアの左腕が腐まで、ロボットのつがれた右腕の中に滑り込む。
左腕を突き入れたまま、右手でも突込んだ鉄の腕をつかんだ。
「このっー！」

力をこめて身体をひねる。バキバキと悲痛な音をたてて金属が裂け、破片をばらまいて、ロボットの右腕が腐体から引きちぎれた。
マシマニアックは腕を自分の身体として操っている。力まかせの脳筋だ。こっつやつこの相手は、わたしの得意分野だ。
フレアは自分が肉体の強さと怪力だけのオペレーターだと自覚している。
「力には力！」

もぎ取ったロボットの右腕を振り上げて、残っている左腕の付け根に向けてたたきつけた。
「グワシャーッ」と破壊音を公園に轟かせて、金属の腕同士が互いを粉砕する。左腕も付け根からちぎれて、地面に落下した。
「腕があああっー！」
フレアが叫んだデータにたれば、は、音がかった声をあげる。
「よくもあつたっ！ グレートスライキングを見くびるな！ グレートスライキングパワーメクラッシュンッ！」

腕を失ったロボットの背後から、一基のローターが前へまわった。背中から伸びる二本のマニピュレーターが、空気を切って回転するローターを支えている。パラパラとうなるこの武器をブーメランと呼んでいいのかわからないが、こんな物騒なものを投げられたら、公園にいる人々に大きな被害が出るかもしれない。
フレアは高聲で飛んだ。上ではなく、ロボットの足もとへ、
頭上からローターが回転、ノコギリと化して襲ってくる。まひのまひでかわすべく、すぐ脇で地面が深く掘り返され、土だけが高く散乱した。

ロボットの股の間をくくり抜いて、背後から鉄の右腕を振りつけてやる。
目体のパラスが崩れ、もんどり打って倒れた。自らの機体内部で、下敷きにならなマニピュレーターが二本ともへし折れる。
転倒の衝撃を受けて呆然とするマシマニアックの首腕を、フレアがつかみ、強引に引っぱった。マシマニアックが自分の胴体がちぎれる心配をしたのか、ロボットの頭部の融合を解いた。フレアに引かれるままにバイロッドスーツをピチリと脱着させた下半身がロボットの頭部の外へすっぽり抜けて、地面をすするると引きさらされる。
フレアは腰のベルトの背中側にある小さいホイールから、白いスクリーンを出し、マシマニアックの首と足首を縛った。常人の犯罪者を拘束するための道具だが、機械から離れたマシマニアックにも有効だろう。

自由を奪われ、地面に横たわるマシンマンニックが、むやみに清々した表情でフレアを見上げてきた。唇から覗く前歯も、美輪麗花で飾いたように白く輝いている。

「今回は多くの敗北だ。だが、次は必ずフレア君に勝つ！」

「理言は別務所で言え、それよりも専用の輸送ヘリなんて、どこで手に入れたんだ。おまえはこれまで普通の乗り物をロボットにしてきたはずだ」

「それは秘密機密だ」

フレアがあきれている。背後からフッと大歓声が押し寄せた。ふりかえると、観客たちがスマートフォンやカメラを向けて走ってくる。

プロのマスコミも撮影機を構えていた。イベントにはもともと取材陣が来ていたが、あきらかに人数が増えている。公園での事件がネットに叩かれて、他のマスコミにも知れ渡ったのだろう。

プロだけあって、マイクを握る男女のリポーター、カメラマンに音響スタッフ、観客たちを巧みにかき分けてフレアの前へ並んだ。遠慮のないマイクの発射がいつせいに突き出される。

「フレアさん！」

名前を呼ぶ合図が響く。

だが、その後につづくはずの箇間の十字砲火が撃たれない。

記者やリポーターの群が、そろいもそろってカメラの前ではありえないボカんと柔けたものになった。マイクをフレアへ向けたまま、動きを止めて人形のこくじつと口をつくしている。フレアはこれまで何回もマスコミにかこまれたが、もちろんこんな異様な状況はじめてだ。

「どうしたんだ？」

周囲を見まわすと、大勢の観客たちも、まだステージにいるラッキーリーグのメンバーも、理事長とげ、セイウのイベントスタッフたちも、死んだ魚のような顔つきで立ち止まっている。イベントには興味がなく、ただ公園で散策しているだけのたかさんの人々も、同様の状態だった。

フレア以外の公園にいるすべての人々が、立つまま意識を失っているようだ。

「なにが起きているんだ？」

テレビで見たことのあるリポーターやカメラマンに声をかけ、周囲をつかんで軽く揺さぶったが、なんの反応も示さない。観客の中に入り、次々に同じことをくりかえしてもやはり無反応。

「無駄だ。彼らは私の支配下にある」

音響装置を通した大きな音が、ステージから流れた。

ステージの壁の中央部分がスライドして、大きなモニターが現れた。この仕掛けはフレアも知っている。ザ・セイウの支援を受けている子供たちの映像を映す予定だった。

しかし明るくあったモニターには、銀色の泣き顔の板面が現れる。

タークレーのスーツ、黒いシャツと革靴。昨夜連選した経歴犯とまったく同一の「コディネット」。

だが、フレアは叫ぶ。

「おまえは何者だ？」

「キスした！ フレアがほくのキスしたっ！」

「これがキスなんて、くっ、ううっ、んんん」

フレアの舌が、亀頭を押されてめくり上げられた。史郎の腰がくねり、亀頭が上下に揺られて、前後の列をならされる。

「喉えて！ ほくの舌、フレアの口で喉えてっ！」

史郎が甲高い声で命令すると、背後の男たちから疑問の声が湧いた。

「フレアチオか？」

「面白いの、フレアチオでいいの？」

「フレアがせかく胸もソコも出してるの！」

「どうしての？ ほいアソコへ行かないんだ？」

後ろから押し寄せる当然の言葉の数々も、史郎の耳には入らなかった。全神経が自分のペニスの先端に触れるフレアの唇に集中している。頭の中では、アタルとフレアで見た女の口で愛撫される快楽への憧憬であふれかえっている。デスタメントのテレパシーで秘めたる欲望を揺り起こされ、燃りたてられた結果だ。

史郎が右手で肉髯を受えたまま、左手でフレアの後頭部をつかんだ。

「早くっ！ ほくの舌、フレアの口の中に咥えろんだあっ！」

後ろから頭を押されて、フレアはかたなく口を開いた。

舌で史郎を運つけないように注意して、たぎる亀頭をそろそろ前列の奥へ納めていく。四方からカメラの列が自分の顔を狙つが、止めるわけにはいかない。

「んっ、んんん、んんん……」

「おおお、フレアに入ってる！ フレアの口の中だ、ほくのが入っていくっ！」

舌の上に亀頭が乗った。表現のしようがない味がじわりと広がり、フレアは息苦しさたまらずむせむせしきまつ。

「えむっっ！ うべっうっっっ！」

新たな命令が、ステーションのスピーカーから下された。

「なにをしている。そいつを満足させるのだ。フレアのフレアチオのテクニクを見せる。射精をさせなければ、そいつは死ぬことになるの！」

フレアは口を委任して男を悦ばせる技術など持っていない。これまでの男との交わりに、いい思い出がない。相手はすべて女性へ！

「パーヒーローを屈辱させ、隣辱するのには血道を上げるオフェンダー犯罪者なんだ。」

（でも、史郎くんを射精させてあげなくては……）

真摯な目つきで史郎の顔を上げて、おすおす舌を亀頭の表面に這わせはじめ、フレアと視線をからませる史郎の顔が、キョッと引きつった。

「いっっ！ 気持ちいいっ！」

パンツの左側の尻たがが強く揺くすほまひ、デニムの布地を噛みしめた。

「うおおお、気持ちいい！ フレアの舌に舐められてっ！ くっくっうっ、たまらないうっ！」

フレアは舌の動きを速くした。ヒョナスチャといっしょに粘つく舌が、自分の身体を伝導して耳にもくくく。

ただ単調に舌を動かしているだけだが、早々と重負青年の二重目のスイッチが入った。

「おっっ、フレア、出すよっっ！！ ほじめてフレアの中に出すっうっっ！」

フレアの後頭部を押さえる左手の指が、無意識に髪を強く握りしめた。フレアでなかったら、毛髪が何本も引き抜かれる強烈な握力だ。同時にデニムパンツの腰が勢いよく前へ突き出される。震動した動きではなく、はじめての口内射精の反射運動だ。



「……ういっひんんん」

「ふんんんんんんっ！」
「ふんんんんんんんっ！」

口を奥まで小さく閉じているので、吐き出すことができない。そのまま精液の奔流は喉から食道へと流れ落ちていく。男の絶頂の証だが、胃の中にとろとろと吸まらる。

「精液を飲んだー！」
「精液を飲んだー！」

「すくすくー！」
「すくすくー！」

「うおおおおおー！」
「うおおおおおー！」

「はあああ……あああ……」
対照的に中絶が静かに息を吐いた。全身から力が抜けて、エニムの尻が地面にへたけこんだ。フレアの口から亀頭がすっぽ抜けて、唾液と精液が空中に飛び散り、フレアの露出した乳房に降りかかる。

「はあああうううううう！」
フレアの身体が大きく跳ねた。マリオネットの糸の操作を失敗したように力クガクと揺れ動き、精液をつけた美乳が踊るように盛大に揺らぐ。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
わずかな精液に触れて、胸に染みこむ淫靡な結核が活性化した。疼きがより苛烈になり、乳房の中でいくつもの鼓動がドクドクと打ち鳴らされる。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
淫乱する女性スーパーヒーローの顔の前に、再び亀頭を突きつけられた。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
ハッと顔を上げると、腰を抜かしたままの史郎の左右に別の男たちが何人も並び、下半身のファスナーやボタンを開いて、勃起し根を突き出してはいる。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
すべての亀頭がパンパンにふくれあがり、燃え盛る鮮色に染まっていた。肉眸には青黒い静脈が浮き上がり、ひこひこり異変なる表情を浮かべてはいる。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
火を噴き出すような肉の絶頂の向こうには、フレアの様々なポーズが並んでいた。サンダークラブ公式トレーナーやシャツを着た男たちがかりで固められている。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
テストメントが意図的にわたしの服を選んだのか！

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
スーパーヒーローを認めるには、最速の方法かもしれない。どこかで見ている悪党どもが大騒ぎして、卑猥な歓声を口汚く発しているだろう。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
眼鏡の輝せた青年が、焦った声でわめいた。大声に合わせて、トレーナーの胸では、フレアの緊張で少々こわばった笑顔が上下に揺れる。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「フレア！ ほくのチンチンを握えろー！」
羞恥感が似合いそうなマッチョ青年の顔では、Tシャツにプリントされたフレアの決め顔が横に伸びていた。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「俺のもしやぶれー！」
びつちり七分けの青年は、真面目な社員にふさわしい地味な紺のスーツとパンツ。首に締めたネクタイでは、拳を前に突き出して空を飛ぶポーズのフレアが何人も連なり、おしゃべりな勢風気の様を作っている。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「私のヘニスも舐めて欲しい！」
フレアの口入りキキッスをかぶる青年。自作のフレア写真集ハッシュで全身を飾る青年。様々なフレアグッズを身につけて、勃起を振りかざす大勢の男たちがそろって吠えた。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「フレアが、俺たちのモノにフェラチオするんだー！」
フレアシードでそのかきまわっているためなのか、全員が同じことを声高に要求して、亀頭を振りたてる。男たちの赤く染まった表情とぼろぼろと、今すぐにも順番を争って殺し合いになりそうに思える。それだけで空を飛ぶような鋭い犬が顔を前にして、飼い主の許可をじっと待っているように、抜け駆けする者はいない。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
肉欲の大合唱に、テストメントの音が重なって反響した。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「全世界の視聴者に告ぐ、フレアの公開講座ははじまりましたばかりだ。これからはもっと淫靡な恥辱を詰めつくすことになる。テストメントに従い、すべて女スーパーヒーローがこうなのだー！」
恐るべき言葉は、地球のあらゆる場所であらゆる階級に響く。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
フレアは強く決意した。

「あっわわわわー！ くっくわううー！」
「……やめしかなじ」

史郎はそれ以上口にしなかった。生まれてはじめて聞かせる女の秘密に感動して、声も出さなくなっている。しかし背後で何人かが野暮な声で、その部分の名称をいつせいに呼ばわった。

「おま○○」

「オマ○○」

「フレアのおま○○」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

「あうんつー」

「んく、んあああつー、入ってへる」

そして、フレアは中断されていた絶頂を極めた。
 「イクッ!!!」
 フレアと史郎の身体がニメートルあまりの高さまで急浮上した。カメラの列が角度を上げて、上昇する二人を追う。
 これまでにも世界の飛行能力を持つオブジェクトたちが、空中で様々なパフォーマンスを披露してきた。まさに空飛ぶ芸術家たちが
 なりきわといせくしいダンスを堂々と公開して、芸術が、悪戯が、と物議をかもし、話題になったこともあった。
 しかし空中で男女が本当に交わり、女性器の中に男性器が深々と埋まる光景を、生中継で世界へ配信するなど前代未聞だ。
 自分が人類史上において前人未踏の境地に到達したことを、フレアは微塵も認識していなかった。ただ本能から与えられる喜びの頂
 点に、文字通り心身ともに逆さまになって、ゆらゆらとたゆまうばかりだ。
 だが史郎が満足していない。生まれてはじめて女の体内に挿入した青年の欲望が、たかがニメートルあまりの高さに浮かんでいるく
 らいで萎えはしなかった。両手でフレアのコスチュームのウエストをつかみ、カマかせ下から腰を突き上げる。
 フレアの中でペニスが斜め上に向かって力強く弾み、まだ醒めていないエクスタシーの海に、海底火山の爆発のごとく新たな高熱の
 大波が盛り上がった。



「ひゃうううっ！ ま、待って！ わたし、まだイクてるのに、ああああっ！」
 フレアの言葉ははいとちもあっさりとお断された。史郎がますます腰を突き上げてきて、熱い亀裂で女肉のより深い所をえくら
 れる。一回えぐられる毎に、絶頂を越える別次元の悦びが炸裂して翻弄された。
 「あきいっ！ ひゃめ、ひゃい！ はくうううっ！」
 よがり声をあげながら、フレアの身体がグルンと反転する。ニメートルの高さで、フレアと史郎は腰を下にし、肉の交わりを続行し
 ていく。史郎が腰を突き下げ、フレアは女の肉を撃ち下けられる。
 「ああうっ！ おんっ！ やはああー！」
 フレアが嬌声をあげるたびに、二人の身体の向きが変わっていく。軌道の汗が複雑な軌道を描いて四方八方へ飛び散り、地上で見
 上げる男たちやカメラに降りかかった。マシンマチックも自分が演じているアニメの主人公風キャラクターを忘れて、愕然とした顔
 でクレーン・クレーン・クレーンの上から空中回転する男女の全裸と半裸を見上げていた。
 不思議で、異様な、疾しく、艶めかしい光景が、全世界に流された。
 そして史郎の叫びが、世界中の人々の鼓膜を揺るがせる。
 「出すっ！ フレアの中に出すっっ!!!」
 フレアは耳もたて青年の叫びを聞いたときには、ちり体内に灼熱の奔流を感じていた。膣内だけでなく、全身の血管に精液が流れこ
 んで、すべての細胞に染みこんでいく思いがする。
 「イクッ」
 喉がつまった。

「……………」
 釣り上げられた魚のように口をバクバクさせて、浮力を失ってマットレスに落下する。フレアが背中を下にして、抱いた史郎を衝撃
 から守ったのはスーパーヒーローの本能だろうが、
 喉から「ヒューヒュー」宙のような高い音が出て、やがて小さな噴きとなった。今もマットレスの上でつながったまま横たわる史郎の
 耳に、その音を響かせて、マイクに拾われないように噴きを耳に流し込む。
 「史郎くん、けがはないっ」
 史郎が目を覚めた。
 「どうしてぼくの名前を!! ああっー」
 史郎の目がさらに大きくなり、顔を引きつらせて、フレアの身体からあなたがたと離れた。女体に深々と埋まっていたペニスが引き抜
 かれると、勃起の勢いが急速に衰えて、ぷらんと垂れる。下を向いた亀裂から、精液と亀裂が混じった液がポタポタと落ちていく。

「あ、わああああ、自分がやったことを全部覚えてる。ほくはなんてことをしちゃったんだ！」
「フレアは上体を起こして、史郎が両腕する姿を見つめる。
(史郎くんがテレバシーの支配から逃れて！ わたしが盗前を呼んだことが効いたの！)
フレアの胸に希望が灯った。その小さい火を押しつづけてみる。背中を冷たい衝撃がたたきつけられた。クレートタイナミックペー
スから大きな鉄の脚が伸びて、五本の指で背後から胴体を握られる。
フレアは反動的に胸の巨腕をふりほどこうとするが、マシンマニアックの力がぶつつけられた。
「たつたつとわがテレバシーから醒めたからといって、勝ったつもりでいるんじゃない。われわれの鉄壁の力は揺るがないぞ、見
ろ！」
まるつきりロボットアーマの主人公が、いい気になった悪役に罵り口調だ。ペースからも二本の少しサイズの小さい脚が伸びて
フレアの後部をつかみ、前を向かせた。
そんなことをしながら、フレアは史郎を凝視している。
一度は正気にもどったと聞えた史郎の目が、また不自然に曇っていく。息が荒くなり、罪悪感で小さく縮まっていた肉棒が、凶暴
な勃起の力を取りもどしていく。
テスタメントの勝ち誇った声が響いた。

「フレアがなにをしたのかわからないが、私のテレバシーから腹中には逃れられない」
どうしようもなく、フレアは機械の腕に身をまかせた。背後から胴体を握る巨腕に持ち上げられて、マットレスに立たされた。
クレートタイナミックペースのてっぺんから上半身だけを突き出していたマシンマニアックが、半身浴の浴槽から出るように金属の
中から立ち上がった。
「てっぺん」
と、大きな音をあげて、自らが建造した基地がシャヤンプする。

赤と青と白とよく配色したヘルメットとパイロットスーツが空中で一回転して、地面に体操選手じみたポーズを決めて着地し
た。満ちるキラキラと光を浴びて身体を照らしているらしく、全身のボディラインがよく出て出るパイロットスーツには、しなやか
な筋肉が表れていた。
パイロットスーツの右の手首からは、金属のロープが伸びて、クレートタイナミックペースに接続されている。マシンマニアックは
身体が直接機械に触れていないと操れないので、そのために必要なのだが、これではさすがにロボットなのかわからない。
「フレア君の最後に残った穴は、ほくがいたぞう！」
右手をパイロットスーツの首に持つていくと、ファスナーをサッと下げた。スーツの中央部が股間まで裂けて、日焼けした黒肌
が現れた。

厚い胸板ときれいに割れた腹筋の下から、体格にふさわしい雄渾な男根がそびえ勃っている。ゴツゴツした亀頭も、太い静脈が浮き
出る肉棒も、肌よりもさらに黒みが濃い。フレアの前には集まる男たちのデニムパンツやチノパン、スラックスやトランクスから林立する
肉棒の群れと比べても、トップクラスのサイズを誇った。
マシンマニアックはほどほどに裸の胴体とたくましい造物をカマシに見せつけながら、ヘルメットを取らない。両腕と両脚と頭は隠し
たまままだヘルメットを握りたてているという、異様で愛憎のないでたちだ。
大小二つのロボットの腕に挿まれたフレアの背後、マシンマニアックが黒い巨根を見せつけながら近づいた。
フレアの左右の膝裏を、後ろから呼びよせマシンマニアックの人間の手で握られる。露乳とスパハーティーたち共有のデータによれ
ば身体能力は常人の範疇だが、十分に剛腕だ。
「なにをする！」

叫ぶフレアの両脚が持ち上げられ、強引に大きく割りかけられる。ロボットの腕で支えられた身体が、空中でM字開脚を強制され
た。
「ミニスカートがすれて、ボディスーツの穴から覗く女性器と肛門が、フレアの前には並ぶ男たちとカマシの列に差し出される。
一度は正気にもどった史郎が、またも他の男たちを面をそらえて卑猥な歓声ではやしたてている姿が、フレアの胸に突き刺さった。
史郎くんをテレバシーから解放させても、たまたま話だけになっちゃった」
「いよいよだ。ほくとフレア君の対決だ。決着がつくときが来た。ほくのクレートフレイトドリルを受けろ！」
陣猛な黒い亀頭が、フレアの股間に近づいてくる。

「おっと、その前に、フレア君、ステージのモニターを見たまえ」
「えい」
ステージのちやっとした映画館サイズのモニターに、不思議なもの映っていた。画面全体が人の肌の色になり、その中心から楕圓
な顔が放射状に広がっている。可憐な一輪の花を抽象的に描いたようだ。
わずかな経路の後に、フレアは気づいた。それが自分自身の肛門だ。M字開脚に大きくけられた股間の下にカマシが盛りこみと
んでもないクローズアップ撮影をされている。
「そんな……」
「わたしの肛門が全世界に流れている……」
そう思うと、羞恥で頭も心臓も凍死しそうだが、この悲惨な映像の本当の意味に気づいて、たまたま叫んでしまった。

「そこは連……」
「ここにいるのさ。ほくはクレートフレイトドリルで女の肛門を貫くのが大好きだ！」
モニターに巨大化肛門。同じく拡大された黒い亀頭が接近してくる。こちらは總部まで鮮明になって、人体とは思えない異質な位
物のようだ。
「ああああ、やめろやめろ……」

黒い肉のモニターに突かれた途端、フレアの肛門が自らゆるんだ。その恥ずかしい姿が、カマシに撮影されて、フレア自身にも見
せつけられる。普通なら排出専門の器官がこんなことになるはずがない。あんなに濡れた液の撮影にはかならない。
ゆるんだ括約筋を、亀頭がゆっくり押し広げていく。背後のマシンマニアックが悠然と白い筒列を見せつけて、わざとスローモ
ーションのように亀頭を進める。拡大映像で見ると、黒い塊が無理やり肛門に侵入していく様子で、今にも楕圓な器官がビビビと
裂けるかた不安になった。

「あっ、あああああ……」
映像の凄惨さに反して、亀頭の先端を呑んだフレアの尻の中に、肉の悦びが熱れた果実を握るようにじゅわっと広がる。舌痛を感じ
るべき異様な、腐の煙葉づけにされた肛門が湧き立つ歓喜で迎え入れた。

「あひ、ふああああ……」
背後から舌を捲き上げられ、M字構図を強いられている下半身がうねと揺れた。その艶めかしい動きは、男根の侵略から逃れ
ようとしているのではなく、もっと早く奥まで入って欲しいと語っている世界の人々に見える。

「マシマニアックとつながるロボットの腕がわすか下がり、フレアの身体が下へ押される。尻の肉花の中にスプツと亀頭が完全に
潜りこんだ。狭い溝壁を力まかせに破壊されて、重い快感が地獄のように響く。」

「ひいっ……くっおああ、大きい！ あべっしゅっ……」
後にスプツと肉棒も忍びしいほどに太く、大寫しに肉の締めつけが聞こえそうだった。

「おお、さすがフレア君はスーパードクターだ！ 輝くほどの尻の締めつけだぞ！」
マシマニアックが笑い混じりの歓声をあげて、スローモーションから一転して腰を猛然と突き上げた。タイミングを合わせてロボ
ットの腕がカクンと大きく動き、フレアの身体を握る。

「あがああ……」
尻の中に、黒い肉棒が根もとまで没入した。太い尻を打ちこまれて、身体を中心に貫通したように動けなくなる。硬直した体内を、
尻から湧き上がった異常な快感が駆けめぐり、途切れ途切れの短い声だけがこぼれた。

「かっ！ くっ！ あー！ ほあー！ こあっ……」
「(1) このまま、射精したら、お尻でイッてしま……」
今までのみじめな動態を世界中にさらしていることを考えれば、今さらリアルセックスでエカスタシを迎えても、なにを変わらな
いだろう。肛門で愛を交わす人々も大勢いる。など合理的な判断をできるわけがない。やはり尻で果てるのは、フレアにとって恐ろ
しく動かしにくい。しかしマシマニアックの行動は予想外だった。

「(2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152) (153) (154) (155) (156) (157) (158) (159) (160) (161) (162) (163) (164) (165) (166) (167) (168) (169) (170) (171) (172) (173) (174) (175) (176) (177) (178) (179) (180) (181) (182) (183) (184) (185) (186) (187) (188) (189) (190) (191) (192) (193) (194) (195) (196) (197) (198) (199) (200) (201) (202) (203) (204) (205) (206) (207) (208) (209) (210) (211) (212) (213) (214) (215) (216) (217) (218) (219) (220) (221) (222) (223) (224) (225) (226) (227) (228) (229) (230) (231) (232) (233) (234) (235) (236) (237) (238) (239) (240) (241) (242) (243) (244) (245) (246) (247) (248) (249) (250) (251) (252) (253) (254) (255) (256) (257) (258) (259) (260) (261) (262) (263) (264) (265) (266) (267) (268) (269) (270) (271) (272) (273) (274) (275) (276) (277) (278) (279) (280) (281) (282) (283) (284) (285) (286) (287) (288) (289) (290) (291) (292) (293) (294) (295) (296) (297) (298) (299) (300) (301) (302) (303) (304) (305) (306) (307) (308) (309) (310) (311) (312) (313) (314) (315) (316) (317) (318) (319) (320) (321) (322) (323) (324) (325) (326) (327) (328) (329) (330) (331) (332) (333) (334) (335) (336) (337) (338) (339) (340) (341) (342) (343) (344) (345) (346) (347) (348) (349) (350) (351) (352) (353) (354) (355) (356) (357) (358) (359) (360) (361) (362) (363) (364) (365) (366) (367) (368) (369) (370) (371) (372) (373) (374) (375) (376) (377) (378) (379) (380) (381) (382) (383) (384) (385) (386) (387) (388) (389) (390) (391) (392) (393) (394) (395) (396) (397) (398) (399) (400) (401) (402) (403) (404) (405) (406) (407) (408) (409) (410) (411) (412) (413) (414) (415) (416) (417) (418) (419) (420) (421) (422) (423) (424) (425) (426) (427) (428) (429) (430) (431) (432) (433) (434) (435) (436) (437) (438) (439) (440) (441) (442) (443) (444) (445) (446) (447) (448) (449) (450) (451) (452) (453) (454) (455) (456) (457) (458) (459) (460) (461) (462) (463) (464) (465) (466) (467) (468) (469) (470) (471) (472) (473) (474) (475) (476) (477) (478) (479) (480) (481) (482) (483) (484) (485) (486) (487) (488) (489) (490) (491) (492) (493) (494) (495) (496) (497) (498) (499) (500) (501) (502) (503) (504) (505) (506) (507) (508) (509) (510) (511) (512) (513) (514) (515) (516) (517) (518) (519) (520) (521) (522) (523) (524) (525) (526) (527) (528) (529) (530) (531) (532) (533) (534) (535) (536) (537) (538) (539) (540) (541) (542) (543) (544) (545) (546) (547) (548) (549) (550) (551) (552) (553) (554) (555) (556) (557) (558) (559) (560) (561) (562) (563) (564) (565) (566) (567) (568) (569) (570) (571) (572) (573) (574) (575) (576) (577) (578) (579) (580) (581) (582) (583) (584) (585) (586) (587) (588) (589) (590) (591) (592) (593) (594) (595) (596) (597) (598) (599) (600) (601) (602) (603) (604) (605) (606) (607) (608) (609) (610) (611) (612) (613) (614) (615) (616) (617) (618) (619) (620) (621) (622) (623) (624) (625) (626) (627) (628) (629) (630) (631) (632) (633) (634) (635) (636) (637) (638) (639) (640) (641) (642) (643) (644) (645) (646) (647) (648) (649) (650) (651) (652) (653) (654) (655) (656) (657) (658) (659) (660) (661) (662) (663) (664) (665) (666) (667) (668) (669) (670) (671) (672) (673) (674) (675) (676) (677) (678) (679) (680) (681) (682) (683) (684) (685) (686) (687) (688) (689) (690) (691) (692) (693) (694) (695) (696) (697) (698) (699) (700) (701) (702) (703) (704) (705) (706) (707) (708) (709) (710) (711) (712) (713) (714) (715) (716) (717) (718) (719) (720) (721) (722) (723) (724) (725) (726) (727) (728) (729) (730) (731) (732) (733) (734) (735) (736) (737) (738) (739) (740) (741) (742) (743) (744) (745) (746) (747) (748) (749) (750) (751) (752) (753) (754) (755) (756) (757) (758) (759) (760) (761) (762) (763) (764) (765) (766) (767) (768) (769) (770) (771) (772) (773) (774) (775) (776) (777) (778) (779) (780) (781) (782) (783) (784) (785) (786) (787) (788) (789) (790) (791) (792) (793) (794) (795) (796) (797) (798) (799) (800) (801) (802) (803) (804) (805) (806) (807) (808) (809) (810) (811) (812) (813) (814) (815) (816) (817) (818) (819) (820) (821) (822) (823) (824) (825) (826) (827) (828) (829) (830) (831) (832) (833) (834) (835) (836) (837) (838) (839) (840) (841) (842) (843) (844) (845) (846) (847) (848) (849) (850) (851) (852) (853) (854) (855) (856) (857) (858) (859) (860) (861) (862) (863) (864) (865) (866) (867) (868) (869) (870) (871) (872) (873) (874) (875) (876) (877) (878) (879) (880) (881) (882) (883) (884) (885) (886) (887) (888) (889) (890) (891) (892) (893) (894) (895) (896) (897) (898) (899) (900) (901) (902) (903) (904) (905) (906) (907) (908) (909) (910) (911) (912) (913) (914) (915) (916) (917) (918) (919) (920) (921) (922) (923) (924) (925) (926) (927) (928) (929) (930) (931) (932) (933) (934) (935) (936) (937) (938) (939) (940) (941) (942) (943) (944) (945) (946) (947) (948) (949) (950) (951) (952) (953) (954) (955) (956) (957) (958) (959) (960) (961) (962) (963) (964) (965) (966) (967) (968) (969) (970) (971) (972) (973) (974) (975) (976) (977) (978) (979) (980) (981) (982) (983) (984) (985) (986) (987) (988) (989) (990) (991) (992) (993) (994) (995) (996) (997) (998) (999) (1000) (1001) (1002) (1003) (1004) (1005) (1006) (1007) (1008) (1009) (1010) (1011) (1012) (1013) (1014) (1015) (1016) (1017) (1018) (1019) (1020) (1021) (1022) (1023) (1024) (1025) (1026) (1027) (1028) (1029) (1030) (1031) (1032) (1033) (1034) (1035) (1036) (1037) (1038) (1039) (1040) (1041) (1042) (1043) (1044) (1045) (1046) (1047) (1048) (1049) (1050) (1051) (1052) (1053) (1054) (1055) (1056) (1057) (1058) (1059) (1060) (1061) (1062) (1063) (1064) (1065) (1066) (1067) (1068) (1069) (1070) (1071) (1072) (1073) (1074) (1075) (1076) (1077) (1078) (1079) (1080) (1081) (1082) (1083) (1084) (1085) (1086) (1087) (1088) (1089) (1090) (1091) (1092) (1093) (1094) (1095) (1096) (1097) (1098) (1099) (1100) (1101) (1102) (1103) (1104) (1105) (1106) (1107) (1108) (1109) (1110) (1111) (1112) (1113) (1114) (1115) (1116) (1117) (1118) (1119) (1120) (1121) (1122) (1123) (1124) (1125) (1126) (1127) (1128) (1129) (1130) (1131) (1132) (1133) (1134) (1135) (1136) (1137) (1138) (1139) (1140) (1141) (1142) (1143) (1144) (1145) (1146) (1147) (1148) (1149) (1150) (1151) (1152) (1153) (1154) (1155) (1156) (1157) (1158) (1159) (1160) (1161) (1162) (1163) (1164) (1165) (1166) (1167) (1168) (1169) (1170) (1171) (1172) (1173) (1174) (1175) (1176) (1177) (1178) (1179) (1180) (1181) (1182) (1183) (1184) (1185) (1186) (1187) (1188) (1189) (1190) (1191) (1192) (1193) (1194) (1195) (1196) (1197) (1198) (1199) (1200) (1201) (1202) (1203) (1204) (1205) (1206) (1207) (1208) (1209) (1210) (1211) (1212) (1213) (1214) (1215) (1216) (1217) (1218) (1219) (1220) (1221) (1222) (1223) (1224) (1225) (1226) (1227) (1228) (1229) (1230) (1231) (1232) (1233) (1234) (1235) (1236) (1237) (1238) (1239) (1240) (1241) (1242) (1243) (1244) (1245) (1246) (1247) (1248) (1249) (1250) (1251) (1252) (1253) (1254) (1255) (1256) (1257) (1258) (1259) (1260) (1261) (1262) (1263) (1264) (1265) (1266) (1267) (1268) (1269) (1270) (1271) (1272) (1273) (1274) (1275) (1276) (1277) (1278) (1279) (1280) (1281) (1282) (1283) (1284) (1285) (1286) (1287) (1288) (1289) (1290) (1291) (1292) (1293) (1294) (1295) (1296) (1297) (1298) (1299) (1300) (1301) (1302) (1303) (1304) (1305) (1306) (1307) (1308) (1309) (1310) (1311) (1312) (1313) (1314) (1315) (1316) (1317) (1318) (1319) (1320) (1321) (1322) (1323) (1324) (1325) (1326) (1327) (1328) (1329) (1330) (1331) (1332) (1333) (1334) (1335) (1336) (1337) (1338) (1339) (1340) (1341) (1342) (1343) (1344) (1345) (1346) (1347) (1348) (1349) (1350) (1351) (1352) (1353) (1354) (1355) (1356) (1357) (1358) (1359) (1360) (1361) (1362) (1363) (1364) (1365) (1366) (1367) (1368) (1369) (1370) (1371) (1372) (1373) (1374) (1375) (1376) (1377) (1378) (1379) (1380) (1381) (1382) (1383) (1384) (1385) (1386) (1387) (1388) (1389) (1390) (1391) (1392) (1393) (1394) (1395) (1396) (1397) (1398) (1399) (1400) (1401) (1402) (1403) (1404) (1405) (1406) (1407) (1408) (1409) (1410) (1411) (1412) (1413) (1414) (1415) (1416) (1417) (1418) (1419) (1420) (1421) (1422) (1423) (1424) (1425) (1426) (1427) (1428) (1429) (1430) (1431) (1432) (1433) (1434) (1435) (1436) (1437) (1438) (1439) (1440) (1441) (1442) (1443) (1444) (1445) (1446) (1447) (1448) (1449) (1450) (1451) (1452) (1453) (1454) (1455) (1456) (1457) (1458) (1459) (1460) (1461) (1462) (1463) (1464) (1465) (1466) (1467) (1468) (1469) (1470) (1471) (1472) (1473) (1474) (1475) (1476) (1477) (1478) (1479) (1480) (1481) (1482) (1483) (1484) (1485) (1486) (1487) (1488) (1489) (1490) (1491) (1492) (1493) (1494) (1495) (1496) (1497) (1498) (1499) (1500) (1501) (1502) (1503) (1504) (1505) (1506) (1507) (1508) (1509) (1510) (1511) (1512) (1513) (1514) (1515) (1516) (1517) (1518) (1519) (1520) (1521) (1522) (1523) (1524) (1525) (1526) (1527) (1528) (1529) (1530) (1531) (1532) (1533) (1534) (1535) (1536) (1537) (1538) (1539) (1540) (1541) (1542) (1543) (1544) (1545) (1546) (1547) (1548) (1549) (1550) (1551) (1552) (1553) (1554) (1555) (1556) (1557) (1558) (1559) (1560) (1561) (1562) (1563) (1564) (1565) (1566) (1567) (1568) (1569) (1570) (1571) (1572) (1573) (1574) (1575) (1576) (1577) (1578) (1579) (1580) (1581) (1582) (1583) (1584) (1585) (1586) (1587) (1588) (1589) (1590) (1591) (1592) (1593) (1594) (1595) (1596) (1597) (1598) (1599) (1600) (1601) (1602) (1603) (1604) (1605) (1606) (1607) (1608) (1609) (1610) (1611) (1612) (1613) (1614) (1615) (1616) (1617) (1618) (1619) (1620) (1621) (1622) (1623) (1624) (1625) (1626) (1627) (1628) (1629) (1630) (1631) (1632) (1633) (1634) (1635) (1636) (1637) (1638) (1639) (1640) (1641) (1642) (1643) (1644) (1645) (1646) (1647) (1648) (1649) (1650) (1651) (1652) (1653) (1654) (1655) (1656) (1657) (1658) (1659) (1660) (1661) (1662) (1663) (1664) (1665) (1666) (1667) (1668) (1669) (1670) (1671) (1672) (1673) (1674) (1675) (1676) (1677) (1678) (1679) (1680) (1681) (1682) (1683) (1684) (1685) (1686) (1687) (1688) (1689) (1690) (1691) (1692) (1693) (1694) (1695) (1696) (1697) (1698) (1699) (1700) (1701) (1702) (1703) (1704) (1705) (1706) (1707) (1708) (1709) (1710) (1711) (1712) (1713) (1714) (1715) (1716) (1717) (1718) (1719) (1720) (1721) (1722) (1723) (1724) (1725) (1726) (1727) (1728) (1729) (1730) (1731) (1732) (1733) (1734) (1735) (1736) (1737) (1738) (1739) (1740) (1741) (1742) (1743) (1744) (1745) (1746) (1747) (1748) (1749) (1750) (1751) (1752) (1753) (1754) (1755) (1756) (1757) (1758) (1759) (1760) (1761) (1762) (1763) (1764) (1765) (1766) (1767) (1768) (1769) (1770) (1771) (1772) (1773) (1774) (1775) (1776) (1777) (1778) (1779) (1780) (1781) (1782) (1783) (1784) (1785) (1786) (1787) (1788) (1789) (1790) (1791) (1792) (1793) (1794) (1795) (1796) (1797) (1798) (1799) (1800) (1801) (1802) (1803) (1804) (1805) (1806) (1807) (1808) (1809) (1810) (1811) (1812) (1813) (1814) (1815) (1816) (1817) (1818) (1819) (1820) (1821) (1822) (1823) (1824) (1825) (1826) (1827) (1828) (1829) (1830) (1831) (1832) (1833) (1834) (1835) (1836) (1837) (1838) (1839) (1840) (1841) (1842) (1843) (1844) (1845) (1846) (1847) (1848) (1849) (1850) (1851) (1852) (1853) (1854) (1855) (1856) (1857) (1858) (1859) (1860) (1861) (1862) (1863) (1864) (1865) (1866) (1867) (1868) (1869) (1870) (1871) (1872) (1873) (1874) (1875) (1876) (1877) (1878) (1879) (1880) (1881) (1882) (1883) (1884) (1885) (1886) (1887) (1888) (1889) (1890) (1891) (1892) (1893) (1894) (1895) (1896) (1897) (1898) (1899) (1900) (1901) (1902) (1903) (1904) (1905) (1906) (1907) (1908) (1909) (1910) (1911) (1912) (1913) (1914) (1915) (1916) (1917) (1918) (1919) (1920) (1921) (1922) (1923) (1924) (1925) (1926) (1927) (1928) (1929) (1930) (1931) (1932) (1933) (1934) (1935) (1936) (1937) (1938) (1939) (1940) (1941) (1942) (1943) (1944) (1945) (1946) (1947) (1948) (1949) (1950) (1951) (1952) (1953) (1954) (1955) (1956) (1957) (1958) (1959) (1960) (1961) (1962) (1963) (1964) (1965) (1966) (1967) (1968) (1969) (1970) (1971) (1972) (1973) (1974) (1975) (1976) (1977) (1978) (1979) (1980) (1981) (1982) (1983) (1984) (1985) (1986) (1987) (1988) (1989) (1990) (1991) (1992) (1993) (1994) (1995) (1996) (1997) (1998) (1999) (2000) (2001) (2002) (2003) (2004) (2005) (2006) (2007) (2008) (2009) (2010) (2011) (2012) (2013) (2014) (2015) (2016) (2017) (2018) (2019) (2020) (2021) (2022) (2023) (2024) (2025) (2026) (2027) (2028) (2029) (2030) (2031) (2032) (2033) (2034) (2035) (2036) (2037) (2038) (2039) (2040) (2041) (2042) (2043) (2044) (2045) (2046) (2047) (2048) (2049) (2050) (2051) (2052) (2053) (2054) (2055) (2056) (2057) (2058) (2059) (2060) (2061) (2062) (2063) (2064) (2065) (2066) (2067) (2068) (2069) (2070) (2071) (2072) (2073) (2074) (2075) (2076) (2077) (2078) (2079) (2080) (2081) (2082) (2083) (2084) (2085) (2086) (2087) (2088) (2089) (2090) (2091) (2092) (2093) (2094) (2095) (2096) (2097) (2098) (2099) (2100) (2101) (2102) (2103) (2104) (2105) (2106) (2107) (2108) (2109) (2110) (2

そして、次の制服のイベント準備も、次の次のサ・セイウのスタッフも、まさに次のラッキリーナファンも、マシンマニアックとともフレアを賣いては、早々と解任していった。

「イクッ！ またイクッ！ あああ、もっとイクッ！」

膣内に精液を撃ち出されるたびに、フレアの性感は跳ね上がり、より高みへと飛翔させられる。絶頂のうえに絶頂が次々と積み重なり、自分がどこまで昇っていくのか想像もつかない。



「イクんんん！ あひゅうら、イクッ！ イクイクイクイク！ イッちゃふおおおっらっっ！」

エクスタシーを叫びつけて、普通の人間ならさかさまに声が届けてしまふのだが、フレアの強靱な声帯は今も澄んだ音色を保っている。しかし意識は朦朧して、まごもろさえることもできない。自分の体内に何人分の精液が蓄積されているのか、数えることも不可能だ。

膝腰とするフレアの耳に、ふいにデスタメントの音が響いた。今までの尊大な声にはなかつた可立ちの色が混じっている。

マシンマニアック、湖時だ、監察とヒーローたちが強行突入の準備をしている情報が入った。プライベートで成田に到着したばかりのイギリス最強のテラバヒーロー「灰色の腕組」が協力を申し出たのだ。

「しかたがない、もっとフレア君の尻を楽しんで、泣かせたかったが、最後には多くの必殺技を喰らえ！ グレイトドリハリケン！」

背後からのマシンマニアックの馬鹿がかい決め声に、フレアは身体をひきまわしく跳ね上げられた。マシンマニアックの膝が最大の勢いで突き上がり、鋭利な亀裂がミサイルのように尻の奥まで侵入する。

「はひっ！ お尻っ！ お尻があるあつ、あつあつあつ！」

尻の奥、いや、膣の中で精液が大爆発した。精液が猛烈な勢いで膣をさかのぼり、尻から膣まで充滿して、膣を浸される錯覚に陥ってしまった。

その先は声にならなかつた。絶頂ととも、膣ととも、膣までたっぷりと精液に沈められたように意識が真っ白に消れる。しばらくの無言の後、膣からかすれた音がこぼれ出た。

「……………ク……………」

全身が硬直して、大関節の映像と化したフレアの肛門がまくれ上がった。敏感な粘膜をこすりたてて、黒い肉棒がススルと引き出される。さらにひときわ大きく肛門が広がり、スリユッ！ と、音を立てて搾り拳のよう亀裂が抜けた。

プシャッ！ 痺れて開ききつた尻穴から大量の白濁液があふれて、左右の内股をたらたらかし流れた。膣と共鳴して、膣口からも何人分も混ざり合った精液が滴り落ちる。

フレアは意識がドロドロに溶滅し、大勢の男たちの体液で汚された半裸身を脱力して、ロボットの巨腕に抱かれたまま前後の肉孔から精液を垂れ流しつづけた。

女性スーパーヒーローの無力でぶざまな姿を、マシンマニアックがながめて、うんうんと満足げにうなずく。

「ははははは！ フレア君の完膚なき罰事な敗北だ！ ほとくの絶対勝利だっ！」

マシンマニアックが表彰台のメタリストみたいに右手を高く振り上げた。

右手と左手のメタリストが、二本の太い鉄棒を十字架の形に組み合わせたものが出現した。

巨腕が動き、フレアの身体が背中から十字架に押しつけられる。鉄棒の裏側から何本もの金属脚手が伸びて、フレアの手足と胴体を巻きしめ、

ロボットの腕が離れると、フレアは鉄棒の十字架に縋にされた姿を残された。

十字架にかけられたフレアの周囲に集まる男たちが、訓練したマスケージムみた動きで左右に分かれた。開いた群衆の壁の向こうで、ひよろりと覆せた人影がステージの隙から出て、歩いてくる。

「馬鹿な！ 佐々木博士はザ・セイウ基金の創設者。善悪の人だ」
フレアは自分の意識の中の他人にとどまらな。脳内のロードキヤスターは記録映像のように表情を変えずに語りつづけた。
「俺が見せられたテストメントの悪態。フレアに見せてやる」

脳内に別の男の姿が現れた。鼻の横溝の毛じゃもじゃの黒髪と、分厚いレンズの眼鏡。フレアがザ・セイウの記録映像で見た佐々木博士が、自分の研究室でこちらへ向かって語りかけてくる。いや、カメコに向かって語りかけていた。これは機械が録音した映像だ。カメコの前で佐々木博士は通かれたように、同じことを何度も何度も繰り返して語りつづけた。その間に、佐々木博士は恐ろしいスピードで死んで、肉を崩壊させられているように薄皮を剥がれていく。博士が清気でくくなるまでを凝縮した映像なのだろう。

佐々木博士は幼い子供へ聞かせる物語のようじゃべりつづける。
博士は自分が清気でくならない命だと知っていた。だが息子の賢い自分に優る科学の才能を持ち、自分の研究を受け継いでくれるとわかって、安心して死ぬつもりだった。しかし賢は偶然、オプビト犯罪者とスーパーヒーローの闘いに巻き込まれて、佐々木博士の命先に死んでしまった。

そして佐々木博士は壊れた。フレアには見えた。
犯罪被害者の遺児を支援する善悪の団体を設立するのと同じ熱意で、復讐の業火を燃え上げさせた。残りの命を、自分に代わってオプビト犯罪者とヒーローに渡すプログラムを開発し続けた。
すなわち佐々木博士が語りかけている相手、それがテストメント。

まさに佐々木博士の遺言。
佐々木博士が死んでから、テストメントは十年かけて自分を進化させ、ついに復讐の実行を開始した。善悪のあるコンピュータウイルスとしてネットを自由に動きまわり、いろんな機械を動かして情報や物資を集め、必要なものを作った。そして恐ろしい仮面をオプビト犯罪者たちを探り、復讐を実行する人形にした。

「わかるが、テストメントは今やネットのどこにでもいる。日本中、いや、世界中にいて、オプビトを狙いつづけるんだ」
恐るべき悪意の言葉を最後に、脳内を占有していたロードキヤスターの記憶がふいつと消え失せた。
そのかわり、新たな悪意がテレパシーで送られてきた。

「……そっか、それなら仮面を、はずしてくれ……」
フレアは血まみれのテストメントのかたわらに膝をつき、仮面に両手をかけた。仮面が顔へなにかの装置が挿入されていないかと危惧したが、あっさりこぼされた。
現れたのは有能な商社マンという容姿の顔。微笑そうで好感が持てる顔。テレパシーでフレアの脳内に現れた。いかに悪意がこぼれた態度とは雲泥が正反対だ。あれはロードキヤスターが持つ犯罪者としての自己イメージで、実際のフロの詐欺師とはどう違う外見がふさわしいのかもしれない。

「……俺はクチな小悪党だが、カメコから自分の好きなように犯罪をやってきたんだ……他人が作ったプログラムなんかには操られて、スーパーヒーローを殺すなんて、プライドが許さねえ……」
「もういい。今から病院へ連れていく。おまえを死なせはしない」
ふいにフレアの胸中からロードキヤスターの顔。地面に転がったテストメントの仮面に影が落ちた。中継されている映像を見て、驚愕がマスコミのハリコプターが来たのだろうか。それともスーパーヒーローが、サンダークラッシュのチームメイトか。

だがフレアの目は、影とともに複雑な機械音を聞いた。通常のハリコプターでも飛行機でもない。顔を上げる同時に、地面を蹴って空へ飛翔する。
善悪には二体の人間型のロボットがいた。

三体は同じ形状で、光沢のない黒い身体は三メートルほど、マシンマニアックが造る子供向けアニメの主要ロボットじみたものではなく、それよりもサイズは小さいが、あきらかに実用に作られた堅固な人型兵器だ。
ただし三体をとも肺部の前面には、数層には不必要な飾りがある。テストメントのシンボルの表しみを表現した銀色の飾り。ロードキヤスターの言葉が正しく、テストメントが機械の中に入りこむプログラムならば、あの三体のロボットもテストメントそのものだ。

三つの表しみの仮面から、きれいにシンクロした音が響いた。
「テストメントに従いフレアに死を送る」
「テストメントに従いロードキヤスターに死を送る」
「テストメントに従いマシンマニアックに死を送る」
三体の声を止めて、フレアは咆哮を放った。

「誰も死なせない！」
フレアは渾身の拳を、一体目の胴体深くにめりこませた。

「フレアが腹で炎を燃やしている。背後から肩をポンポンたたかれた。ふりかえる。スターサンダーのほがらかな笑顔がある。その顔つまたと。宿命が。運命が。そういうことを考えているでしょう。ダメダメ。宿命なんかじゃなくて。わたくしは自分の意志で。ヒーローをやりたいたいからやっていることを忘れてはいけないわ。」

「わかってるって。リーター！」

フレアは本物の笑みを浮かべた。

*

この翌日、フレアは性の解放と進化を謳う前衛芸術パフォーマンス集団「空飛ぶ肉棒」から参加を要請された。
もちろん、丁重に断った。顔を引きつらせて。

